

(2020 年度) 早稲田大学

『中東・イスラームのフィールドワーク』

堀内正樹

講義ノート(1)

みなさん、こんにちは。初めまして。堀内正樹です。

本来ならば教室で皆さんの顔を見ながらあれこれ話をするのを楽しみにしていたのですが、コロナ禍の状況で「オンライン授業」にせざるを得ないということなので、毎回の授業を文章という形にして話させていただくことにしました。コーヒーでもすすりながら、読んでください。

声で話をするということとこうして文章を書くこととは質的に大きな違いがあることはいうまでもありませんが、それにかかる時間もずいぶん違ってくると思います。90分で話したいことを文章にするのにどのくらい時間がかかるかわかりませんが、とにかく今からやってみます。そこで皆さんにご理解いただきたいのは、この文章はあくまでも私の頭に浮かんでくることばをそのまま文字化するものなので、通常の本や論文のように「推敲」がほとんどなされません。繰り返しが多かったり、誤字・脱字があったり、そもそも起承転結もどうなるかわかりません。それが声で話すということですから。

では前置きはこのくらいにして、さっそく第1回を始めます。この授業では「中東やイスラーム地域のフィールドワークに関することなら何を話してもよい」と責任者の教授からいわれていますので、お言葉に甘えて自由に思ったことを話してゆきます。次回以降は中東の具体的な話をしますが、今日はとりあえず、あまり面白くないですが、一応「フィールドワークってなんなんだ？」ということを批判的に抑えておくことにしましょう。あまり実のある話ではありませんが（一般論というのはそもそも面白くありません!）、この授業全体の結論みたいなことをお示しすることになるでしょう。

その前に、自己紹介が必要ですね。私の略歴はウィキペディアに載っているのを最近発見しました。だれが書いたのか知りませんが、間違っていないのでそれを見てください。私の年齢は68歳で、もうおじいちゃんです。初めてアラブの地を踏んだのが19歳だった1971年ですので、もう50年近くになります。30歳代後半に喰ってゆくために大学の先生になってからは、その前の大学院生時代からそうですが、「社会人類学」という分野を看板にしてきました。ちなみに、早稲田で授業をするのは今回が初めてです。

さて「フィールドワーク」というのは、今では社会学でも心理学でも歴史学でも経済学などの分野の人たちでさえも使うポピュラーなことばになっています。そこでの意味は「実地調査」、「現地調査」「実態調査」といったようなことで、机上の作業から離れ、見慣れない場所・見慣れない人々のところへ直接行って何かを調べる。興味の対象は暴走族・女子高生・障害者・在日・会社員・病人等々なんでもよいのですが、ようするに「我々のようなふつうの人々」ではない人々ということですから、かなりヘンですよ。でもそれが実情です。なぜそうなったのかというと、「フィールドワーク」というのはもともとは、世界で最も変わった人々のことを知りたいという社会人類学の専売特許だったから、よかれ悪しかれその線を引き継いでいるのだろうと私は思います。

ともあれそういうわけですから、その社会人類学を専門分野としてきた私が「フィールドワーク」について語ってもよいだろうと思うわけです。

そもそも社会人類学が誕生した 19 世紀には、「フィールドワーク」ということばはなかったようです。ちなみにこの分野はイギリスでは「社会人類学(Social Anthropology)」、ドイツやフランスなどの大陸部では「民族学(Ethnologie)」などと呼ばれていましたが、中身はほぼ同じと考えてよいでしょう。その頃は草創期の重鎮たちが書齋で壮大な人類の来し方を考えるといった趣の、今流に言えば「在宅勤務」をしていたわけです（文化進化論の時代）。そのとき彼らが関心を向けたのは、自分たち「文明人」から最も隔たった「未開人」のありようだったわけです。ものを考えるときに最も便利なのが対照的なものだからです。こうした対立や分離の発想の仕方を私は「境界的思考」と呼んで批判しようとしてきたのですが、境界的思考はじつは人類学の分野に限られるわけではなく、文系・理系を問わず広く 19 世紀的の西欧科学に共有されていて、それはドイツのゲッティンゲン大学を拠点とした数学基礎論に典型的に結実しました。確率論と集合論が車の両輪になっていました。今日の IT 時代にまでその発想の流れは延々と受け継がれています。「同じ」か「違う」かということに依存し、「見做す」という約束事にもとづいて秩序やパターンを志向する認識方法です。詳しくは後日また改めて説明する機会があるでしょう。

話を戻しましょう。19 世紀から 20 世紀の変わり目になると、次世代の若い人たちが躍動を始めます。先輩たちの「在宅勤務」に代わって、現場で仕事をしようという動きです。その先鞭をつけたのがイギリスのランカシャー生まれのスペンサー（Walter Baldwin Spencer, 1860-1929）という人です。面白いのはこの人は元々オックスフォード大学で生物学を専門としていたのです（もっとも、この頃はいまのような理系とか文系といった垣根はほとんどなく、たとえば哲学と数学・物理学は同じ人がやってもまったく違和感はなかったんですが）。彼は 1887 年に弱冠 27 歳の若さで、当時はまだイギリスの流刑地の趣を残していた新開地オーストラリアのメルボルン大学の初代生物学教授として赴任したのだそうです。そして 1928 年にイギリスへ帰国するまでの約 40 年間でオーストラリアで過ごし、そのうち特に 30 歳代におこなったオーストラリア内陸部への調査行で有名にな

りました。そのきっかけはメルボルンの地元の企業家が出資した「オーストラリア内陸探検隊」に写真担当の動物学者として参加したことです。この段階ではまだ彼は人類学とはほとんど関係ありませんでした。ところがこの探検行の帰途で、ある男との偶然かつ運命的な出会いがありました。それがギレン(Francis James Gillen)という電報局の技師で、今では有名な観光地にもなっているオーストラリア中央部のアリス・スプリングスという、当時は危険で野蛮な砂漠の奥の僻地に勤務していたわけですが、ギレンの家にはそのあたりに住んでいるアランダ族というオーストラリア先住民(アボリジン)が出入りしていたのだそうです。スペンサーはこのギレンの家に3週間ほど居候したときにアボリジンと親しくなり、その後も何度もギレンとともにアボリジンのことを詳しく調べ、それをいくつもの論文や本などの文章にして発表しました。そうした文章がイギリス本国で反響を呼び、人類学者たちにも衝撃を与えたのです。

というのも、英語圏の人々にとってアボリジンは世界で最も原始的で単純な未開人だということでも有名だったからです。スペンサー自身も「石器時代の人々」と呼んでいるくらいです。ですがスペンサーは「アボリジンは単純だ」というそれまでのイギリス人の常識とイメージを覆し、彼らが非常に複雑な社会システムや認識システムを持っているのだということを知らしめたのです。これはそれまでの「在宅勤務」ではなし得なかったことで、先ほど「自分たち文明人から最も隔たった未開人」といいましたが、その前提を根底からひっくり返すような事実を現場から届けたわけです。衝撃というのはそういうことです。

スペンサーとギレンの話がちょっと長くなってしまいましたが、それには意味があつてのことで、彼らの仕事は当時はまだ「フィールドワーク」とは呼ばれていなかったと思うのですが、それでも大事な点をいくつも含んでいるのです。

まずは彼らの仕事が今日まで一部の人々に語り継がれているのは、なんといってもそれが文章にして残されたからです。だから当時の人々はいうにおよばず、今の人もそれを読むことができます。彼らがなんの文章も残さなかったとしたら、彼らの活動は単なる探検・冒険・旅行の類いに過ぎず、北極探検や南極探検やエベレスト登頂みたいなものです。ですから文章、つまり記録ないし報告というものが、後に「フィールドワーク」と呼ばれることになる活動の必須要件になりました。報告なきフィールドワークはないということですね。

それだけではありません。そうした報告が無味乾燥な事務書類みたいなものだったとしたら、なんの価値もありません。読む人たちに衝撃を与える必要があるのです。「アボリジンは単純な人々なんかではない」という報告が「へえ～、そうなの」程度の反応しか呼び起こさなかったとしたら、その報告はすぐにゴミ箱行きでしょう。衝撃というのは、読む人たちの認識の根幹部分を揺るがすものでなければなりません。大げさに言うとパラダイム・チェンジをもたらすものです。

ところが、ここでもう一つ別の問題が出てきます。報告は読む人に衝撃を与えたとしても、書かれた対象となった当の人々にとっては無関係だという点です。スペンサーとギレンについていえば、当時のアボリジンがもし英語を読めたと仮定して、それを読んで「衝撃」を受けたでしょうか。自分たちにとっては無関心な当たり前のことか、知られたいくないことしか書かれていなかったはずです。つまり後の時代にフィールドワークと呼ばれるようになる活動を条件づける「報告」というのは、あくまでも報告を書き、そしてそれを読む人々にとってのみ意味あるもので、いわば自分勝手な性格を持っています(ちなみにヨーロッパ人にとってのみ意味のあった「新大陸の発見」と同じような構図です。現地の人々にとってはその大陸は新しくもなんともなかった!)。今日の最初のほうで私がヘンダと言った「我々のようなふつうの人々ではない人々」という認識スタンスはまさにそれだったのです。自分勝手なんですね。このことは人間を対象とした学問を標榜する研究者なる人種が陥りやすい陥穽なので、よく自覚しておく必要があります。そして報告が自分勝手なら、それに連動するフィールドワークと呼ばれる枠組みもまた自分勝手なのです。そのことは後で述べます。

スペンサーの活動に絡めてもう一つ言っておきたい事柄があります。もう少しのちの時代から今日まで、フィールドワークというのはなんらかの目的を設定して、できれば用意周到に準備・計画して実施されるということが求められます。こんにち日本の研究者の多くが依存している資金源に文科省の科学研究費補助金というものがあります。それをもらうためには、そうした準備や計画や目的や見通しや得られそうな結論やどんな役に立つのかといった事柄を細かく書かされて審査を受けます。文系・理系を問わず、科学というものはそういうものだと前提されているわけですね。ところがいくつかの理系のノーベル賞クラスの業績もそうであるように、衝撃を与えるような業績・報告というのは「偶然」の産物です。スペンサーは当初動物の研究のために探検隊に参加したわけで、ギレンとの偶然の邂逅がその後インパクトのある民族誌を生み出した。まさに偶然の産物です。事前に計画されたものなどではありませんでした。

(ここで「民族誌」についてちょっと説明を加えておきます。「民族誌」は Ethnography の訳語で、世界のいろいろな人々に関する記述・報告、ただし「我々ふつうの人々」を除いて。そうした文章をより正確には Ethnographical Text といいます。これと似たことばに Ethnological Text というのがあります。こちらは Ethnology の記述、つまり民族学の記述ということになります。民族学 (Ethnology) は、先ほどちょっと触れたようにヨーロッパ大陸部の用語で、イギリスの社会人類学も中身としては似たようなものでした。だから Ethnological Text という場合には民族学・人類学をベースにしなければならないのですが、Ethnographical のほうはそうした制限がかからない。したがって、社会学者や言語学者や歴史学者なども Ethnographical Text を生み出しています。スペンサーも自分の本に Ethnographical のほうを使っています。)

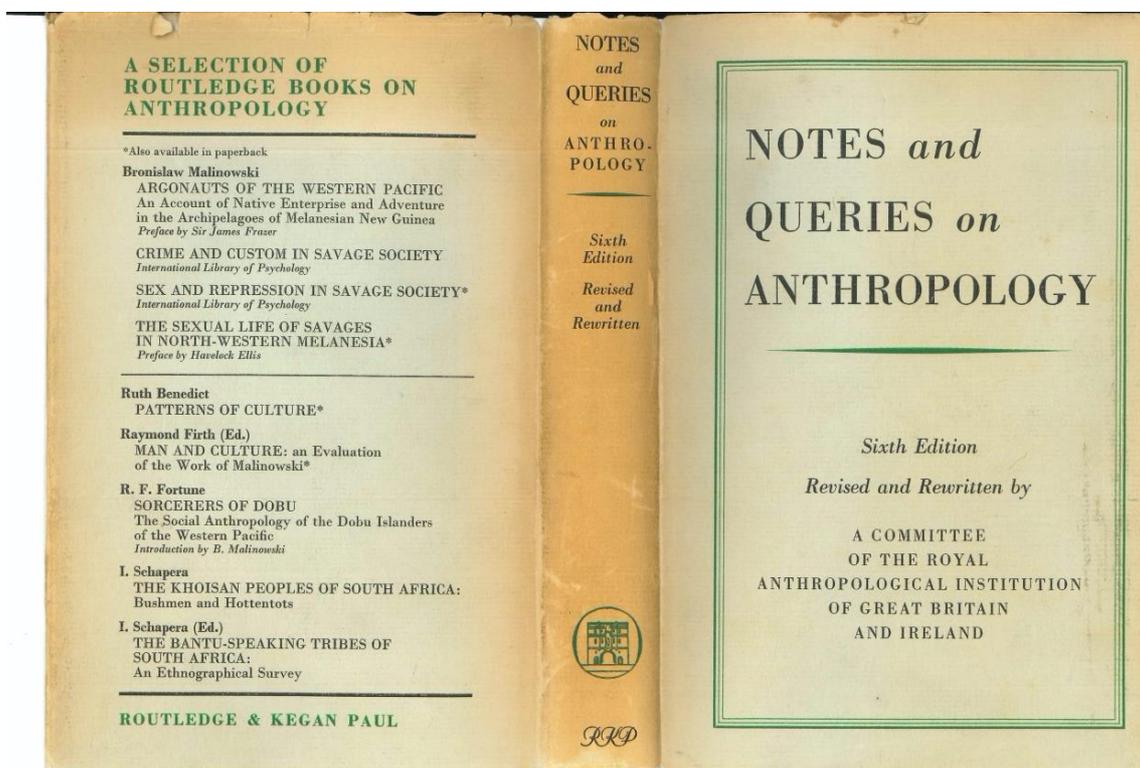
話を戻しましょう。ここまでスペンサーとギレンに絡めて「現場」「報告（民族誌）」「偶然」という三つのキーワードが出てきました。いずれも非常に重要な事柄なのですが、いずれもまだ萌芽期というか学問が未分化だった素敵な時代（私にとっては）の話でした。それが20世紀に入ると様子が変わってきて、「フィールドワーク」ということばが定着しはじめ、それが社会人類学（アメリカの場合は文化人類学）とリンクされるようになった。同時にそれはひたすら職業化の道をたどったのです。

科学史で有名なトーマス・クーンという人の『科学革命の構造』という本があります。ちょっと古い本ですが、そこで「パラダイム」ということばでそうした職業化のプロセスが詳述されているので、お読みになることをお勧めします。いったん新たな発想が受け入れられ始めると、それがどんどん細分化、精密化、組織化、肥大化し、要するにルーティン化されてゆくけれども、当初の柔軟さや奔放さは失われてゆくということです。社会人類学の場合、教科書などでそのパラダイム化の出発点とされているのがラドクリフ・ブラウン（Alfred Reginald Radcliffe-Brown, 1881-1955）という人ですが、この授業は人類学史の授業ではないので説明はやめておきます。ただ彼と並んで近代人類学の幕開けを告げたといわれるポーランド生まれのブロニスラフ・マリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942）という人について少しだけ触れておきたいと思います。

彼はニューギニア東方沖のトロブリアンド諸島というところを舞台に『西太平洋の遠洋航海者たち』という民族誌を書いて、それが人類学のバイブルとも言われ続けているくらいですが、彼がおこなった現地調査がその後理想的なフィールドワークだと見なされ、お手本とされてきました。少なくとも1年か2年は現地に住み込み、現地の人たちのことばを話し、現地の人たちと一緒に暮らし、現地の人たちと同じものを食べ、要するに現地の人たちと一体化しつつ、かつ一定の距離をとって観察・記録するという、「参与観察」（participant observation）という手法の生みの親だというわけです。まあそれはそれとして、私がここで言うておきたいのは、フィールドワーク即マリノフスキーといわれるほど有名な彼の調査も「偶然」の産物だったという点です。先のスペンサーの場合と一緒にですね。マリノフスキーは26歳でポーランドからイギリスへ渡ったあとロンドン・スクール・オブ・エコノミクスというところで社会人類学を勉強し、30歳の頃、ある会議の助手を務めるためオーストラリアへ行きました。ところがイギリスへ帰国しようとしていたところ第一次世界大戦が勃発してしまいました。彼はポーランド人ですがオーストリア国籍だったため敵国人扱いされて、ロンドンへ帰る船に乗せてもらえず、オーストラリアに残るしかなかった。そこでロンドンにいる先生たちの尽力で資金を獲得し、イギリスの勢力圏だったニューギニア沖のトゥーロン島などで現地調査をしたあと、運命のトロブリアンド諸島と出会うわけです。戦争が起こらなかつたら彼のトロブリアンドでのフィールドワークはなかつたかもしれない。つまり最初から目的を持って計画した調査ではなかつたの

です。

さてだいぶ話が長くなってきたので先へ進みましょう。パラダイム化・職業化が進んだ段階でのフィールドワークと報告（民族誌）についてです。先ほど触れたラドクリフ・ブラウン以降、彼に指導された若いイギリスの社会人類学者たちは世界中へ、といってももっぱらイギリスの植民地ですが、そうしたところへ出かけて行ってフィールドワークをおこない、続々と民族誌を著してゆきました。そのときに彼らが使ったマニュアル本があります。『Notes and Queries on Anthropology』という結構ぶ厚い本ですが、その目次だけ和訳しておきましたので、見てください。膨大な項目があり、こうした事項を現地で調べ、記録してきなさいというわけです。



目次

第1部 形質人類学

形質人類学の方法
血縁集団

第2部 社会人類学

1. 導入
2. 方法
目的と範囲
調査のテクニック
3. 社会構造
導入
土地の管理
性と年齢
家族
親族
リネージと階級
社会階層

4. 個人の社会生活
日々のルーティン
親と教育
妊娠から結婚までのライフ・サイクル
性的成長
結婚
老年、死、死者の処理
5. 政治組織
政治システム
法と裁判
財産
6. 経済
導入
生産
分配
交換
消費

7. 儀礼と信念
導入
宗教的信念と実践
人間に関する信念
超自然的存在とその媒体に関する信念
儀礼の形態
呪術的信念と実践
妖術と邪術
薬と治療に関わる儀礼と信念
物理現象に関わる儀礼と信念
経済活動に関わる儀礼と信念
社会構造に関わる儀礼と信念
8. 知識と伝統
記録とコミュニケーション
認識と計測
宇宙観、季節、気候、暦
地理認識と地勢認識
植物
人間と動物（の王国）
薬と施術
歴史と神話
物語、ことわざ、歌

9. 言語
ジェスチャー、サイン、シグナル
話し言葉
音韻
文法
意味

第3部 物質文化

導入
職人の地位
身体のカバーと装身具
衣類
住居
火
食物
刺激物、麻薬
食料入手方法
道具、機械
武器
食料・飲料などの貯蔵容器
電
陶器
ガラス
石器・木器・金属器の製造
採石・採鉱
塩

皮革、織物
紡績、紡織
染色、絵付け
旅行、運輸
美術
音楽
舞踊
演劇
ゲーム・娯楽
手品

第4部 フィールド資料

補遺

写真
動画
蒐集と荷造り
骨の保存
紙詰め

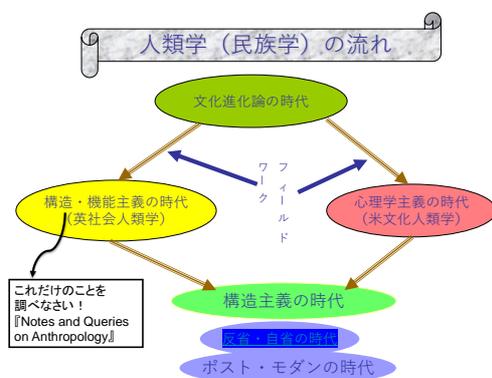
ある現象、例えば文化でも社会でもよいのですが、それはさまざまな要素が絡み合っていて生じている、つまり構成要素の組み合わせとして現象を理解する。そうした発想、それが近代西欧科学の共通の基盤になっていて、その発想に基づいてこのマニュアルは作られました。目次に書かれた項目は構成要素だということになります。それらの要素がそれぞれの土地でどのように結びついているか、どのように機能しあっているか、それを解き明かして記述するのが社会人類学者の仕事だというわけです。そういう時代が20世紀半ばまで続いて、「構造・機能主義の時代」と呼ばれ、イギリス社会人類学の絶頂期だったといってよいでしょう。まあそれはそれとしておいて、ここで指摘しておきたいのは、そういう仕事は事前に十分な訓練と学習を積んだ人でなければこなせない、つまりプロの仕事であって、ジャーナリストとかビジネスマンとか旅行者といった素人には無理だということが主張されたことです。それはその通りだと私も思います。『Notes and Queries on Anthropology』の目次を見ればおわかりのように、これだけの膨大なことを調べ上げるには最低でも1年や2年がかかります。そうした丹念で精緻な仕事こそが「フィールドワーク」であり、一週間とか一ヶ月くらい現地へ行って現地の人たちと仲良くなり、話を聞いてきました、なんてのはフィールドワークとはいえないというわけです。ですから「フィールドワーク」は社会人類学の

固有のツールとして職業化されたということになります。ではそうした仕事としてのフィールドワークはその後どうなって今に至るのかという次のフェーズに入りたいのですが、そのために、せっかく社会人類学の話をしたので、ごく簡単にその後のこの学問の展開とフィールドワークの変化を紹介しておきましょう。

イギリスで社会人類学が隆盛だった頃、つまり 20 世紀半ばまでですが、アメリカ合衆国では「文化人類学」という名で別の流れが展開しました。イギリスが海外の植民地をおもなフィールドとしたのに対し、アメリカは自国内にいた「ふつうの人々ではない人々」であるところのインディアン（ネイティブ・アメリカン）をもっぱら調査対象として、彼らの心理や性格といった事柄に焦点を当てて、フィールドワークを押し進めました。だから心理学的人類学とも呼ばれます。

イギリスとアメリカではそうした違いがあったのですが、第二次世界大戦が終わって植民地が次々と独立する 1950～60 年代になると、社会人類学も文化人類学も壁にぶち当たります。それまでのように自由に調査が行えなくなったのです。それまでは植民地宗主国という立場で勝手に、あるいは強権的に上から目線で調査を実施できたのですが、それらの地域が独立した主権国家になると力関係のベクトルが逆になり、人類学的フィールドワークは植民地主義の手先あるいはスパイ活動とさえ見做され、反帝国主義に燃える多くの新興独立諸国で調査が許可されることは非常に困難になり、許可されたとしても多くの制限を課されたのです。特に人類学調査の対象は一般常識でいうところの「遅れた」「野蛮な」「部族民」などですから、新興独立国家にとっては「恥部を暴かれる」といった嫌悪感があったことに加え、場合によってはまだ完成してもしない国家の分裂につながる政治運動を扇動するような可能性を持った危険なことでさえあったわけです。

ではアメリカの場合は調査対象が国内だから問題がなかったかといえば、そうではありません。折から盛り上がってきた黒人の市民権運動や女性解放運動ないしフェミニズムなどに連動する形で、インディアンなど社会的マイノリティーの人たちが「異議あり」という声を上げられるようになったのです。もはや WASP 的な上から目線は通用しなくなったわけです。



こうした状況下で社会人類学と文化人類学はともに理論面でも変化を迫られ、1950～70年代にかけて構造主義という新たなパラダイムが一世を風靡したわけですが、これは20世紀初頭の記号論理学(数理論理学)などとも無関係ではない記号論という発想をベースに持つ思想です。これについての説明は若干複雑で時間がかかるので、今は省略して、後日に回します。

ともあれ、好き勝手にフィールドワークができなくなったこの時期に、もう一つ重要なことが人類学の中に生じました。若者による大人たちへの異議申立てです。これはいわゆるビートルズ世代を中心にヨーロッパもアメリカもアジアも巻き込んだいわば世界的な現象として学生運動やヒッピーなどさまざまな形があったわけですが、人類学の内部でも若手が従来の人類学に、そしてそれを包み込む学問全体に、さらには学問を制度として成り立たせている欧米の社会体制そのものに対して疑義を呈したのです。自分たちが教わってきたことは正しかったのか、自分たちが受けた訓練には正当性があるのだろうか。違うだろう！そのことを彼らは故郷から遠く離れた異境の地でのフィールドワークの経験を通して感じ取ったのです。フィールドワークはもはや他者を知るための手段ではなく、自己、それも自己を成り立たせている欧米の社会体制自体の嘘っぽさと脆(もろ)さと根拠のなさを暴く手段になったのです。ですから彼らが書いた報告は、それまでの客観性を装った他人事のような民族誌の記述とは違って、自己変容と自己省察を主題としたものになりました。記述すること、表象すること自体が持つ権力性と暴力性に極めて敏感だったからです。のちにこのような記述は「実験民族誌」と総称され、「反省人類学」と呼ばれることもあります。じつはこうした実験民族誌のおもな舞台となったのがモロッコなのです。モロッコについては何回かあとの講義で詳しくお話ししようと思います。実験民族誌についても、もし時間があればそのとき詳しくご紹介しましょう。

実験民族誌ないし反省人類学がその後どうなったかという、1980～90年代に「ポスト・モダン」とか「ポスト・コロニアル」とか呼ばれる輪郭のない思想潮流に呑み込まれてゆきました。これは人類学や社会学といった分野のみならず、文学や芸術までも含めた広範な分野に広がった潮流です。ただしこれは今「輪郭のない」と言ったように、何かまとまった主張なり方針なり発想なりをもったものではなく、いわばてんでんばらばらな状態の総称です。ただ一つ共通点をあげるとすれば、「もう近代的な認識とか植民地主義的な発想から脱出しようぜ」ということになるのでしょう。よく誤解されているのは、現代という時代は近代を脱したとか、植民地主義はもう終わった、という誤ったメッセージです。「近代」も「植民地主義」も決して終わったわけではなく、現実にはまだとても根強く残っています。そこで、「せめて我々の頭の中だけはそうしたいかがわしい発想というか認識方法から脱する必要がある」という反省を込めたプロテストだといってよいでしょう。実験民族誌からずっと続くスタンスです。ただ気をつけなければならないのは、それらの試みが往々にして表象・文章・記述の内側に閉じこもってしまう危険性、平たく言えば言葉遊びに堕してしまう傾向

があるということです。極端な例ですが、フィールドワーク不要論さえ唱える人類学者さえ現れたのです。でも形は見えなくても、また表象するのが難しくても、そしてとりとめのないものかもしれませんが、「現場」や「生活」は相変わらず世界中どこにでもしっかりと残っているのです。

さてこういう状態を受けてフィールドワークはどうなったのでしょうか。人類学が閉塞状態というか、反省状態に陥って、かつてのような近代を象徴したグランド・セオリーを放棄したのに呼応して、フィールドワークも『Notes & Queries』のような総合性と専門性を手放し、人類学の専売特許という性質を失いました。そしてさまざまな隣接分野に拡散され、援用されたのです。社会学者も歴史学者も言語学者も、それぞれ自分たちの枠組みに取り込む形で自由にフィールドワークを利用するようになったわけです。ただし「職業としてのフィールドワーク」という枠組みだけはそれぞれの分野で継承されたのですが。

ではその後21世紀に入ってから今日まで、フィールドワークはどこへ行ったのでしょうか。「職業としてのフィールドワーク」ですから、職業つまり専門分野のあり方にフィールドワークは従属します。日本の場合についてみると、ポスト・モダンの自由な潮流はまだ残ってはいるものの、それとは裏腹に、人類学をはじめさまざまな学問ジャンルはここ20年、生き残るために組織化・制度化への道をたどりました。そしてなによりも資金源への依存度をこれまでになく高めました。先ほども触れた科学研究費補助金をはじめとする公的資金は財政難を名目に減らされ続け、少ない財源を有効に活用するという政府方針の下、「選択と集中」「競争」「効率」がすべての学問分野に対して押しつけられたのです。その結果、研究は「すぐに成果の出るもの」や「しっかりと計画されたもの」、そしてなによりはじめから「世間受けするもの」が要求されたのです。貴重な税金を使うのだから研究成果は納税者に還元されなければならない、これを社会的ニーズへの対応というわけですが、世間受けに他なりません。それと透明性つまりカネをどこにどれだけ費やすのかをあらかじめ細かく決めて報告せよ、という要求もあります。

ここで今日の講義の最初のほうを思い出してください。スペンサーやマリノフスキーあたりです。「報告」「偶然」「現場」という三つの重要なキーワードがありましたね。そのうちで「報告」は読む人たちに衝撃を与えるものでなければ意味がなかったですね。世間受けを狙ったものに衝撃性があるでしょうか。はじめから世間に迎合しようとするものに衝撃性などあるはずがないでしょう。今の時代の具体例を挙げれば「グローバル化」「多様性」「共生」「ジェンダー」「国際化」「テロ」「格差」「人権」「災害」など。扇情的な事件報道の場合を除いて、こうした聞き飽きた流行の言葉に皆さんは衝撃を感じるでしょうか。ところがこうした言葉にリンクさせて研究申請すればお金はつきやすいのです。

次に「偶然」です。衝撃性のある優れた民族誌の多くが偶然の産物でした。世の中は多くの偶然によってできていることはいまでもありませんよね。東日本大震災や現在の新型

コロナウイルスをあげるまでもなく、大小さまざまな数多くの予測できない偶然に我々は巻き込まれます。フィールドワークもしかりです。予期せぬことが次から次へと起こり、当惑し、結果的にはそれが良い結果をもたらすこともあれば、逆にうまくいかないこともあります。そして世の中に同じことは二度と起こらないということも皆さん経験済みだと思います。何が起こるかわからない。何が起こっても不思議ではない。ですから「予定を立てる」とか「計画する」とか「結果を予想する」ということがいかに空虚で当てにならないことかは当然おわかりだと思います。「透明性」とか「計画性」というのは本当に有意義な研究には不向きで、最初から結論がわかっているようなどっちでもいいような研究向きというのはいきなり言い過ぎでしょうか。

そうすると現在の「仕事としてのフィールドワーク」に残されているのは「現場」だけということになります。そしてその現場性というのは、残念ながら、与えられた(あるいは自発的に付度した)テーマを当初の計画通りに実証するための裏付け手段、悪くいえばアリバイ作りのための手段になってしまっていることが少なくないのです。

さてそろそろ今日の話の総括に入ります。

まず、フィールドワークには「現存する人間の社会と文化を研究するのに不可欠な基礎作業」ということと「対象とする人々に直接接触して、情報を得る」という二つの建て前がありました。それを前提にして目標が立てられます。しかしフィールドワークの「目標」をどう設定するにせよ、その人はロボットのようにその目標に沿った行動だけするという事はまずありません。さまざまなことに出会い、さまざまなことをその人は経験します。さまざまなことをその人は考えます。そしてさまざまな行動をします。これをフィールドワーク以外の事柄という意味で「残余経験」と私は呼ぼうと思います。残余経験は一人一人違った生い立ちや背景や文脈から作られるのはいうまでもありません。ですから、フィールドワークには非常に多様な実施形態があり得るし、それでかまわないはずで、専用の資金をもらって行ういわゆる学術調査ばかりでなく、自費で出かけてもよいし、スポンサーが最初に参加したような探検隊であってもよいわけですし、留学、旅行、商売、修行、協力活動、ボランティア、布教、政治ミッション、軍事ミッション、結婚生活など、なんだったフィールドワークを生み出すことができます。

そして残余経験とフィールドワークの比率は人によって、また状況によっても変わります。ほとんどの時間とエネルギーがフィールドワークに費やされる単目的の学術調査とは対照的に、残余経験のほうがその人にとって比重が大きいことだって珍しくはありません。現地での長期にわたる生活がまずあって、その一部がフィールドワークに充てられることもあるし、また先ほど触れたように、なんらかの偶然によってフィールドワークに関わることになったり、他の仕事メインで、その付随物としてフィールドワークがもたらされることもある。そのほかにまださまざまなケースが考えられるでしょう。

フィールドワーク（の建て前！）

- = 現存する人間の社会と文化を研究するのに不可欠な基礎作業。
- = 対象とする人々に直接接して、情報を得る。・・・<参与観察>

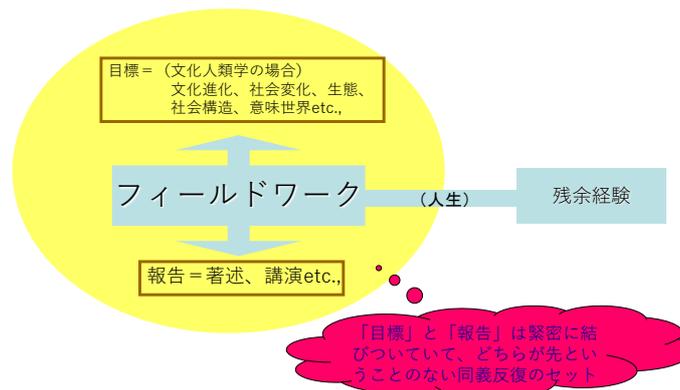
フィールドワークを生み出す実際の多様性

- ①実施形態の多様性
 - ・・・学術調査、自費調査、留学、旅行、商売、修行、協力活動、ボランティア、布教、政治ミッション、軍事ミッション、結婚etc.,
- ②実施者（＝フィールドワーカー）にとつての意義の多様性
 - ・・・一時的仕事（強制的・自発的）、生活そのもの、偶発的出来事、他の仕事の付随物、逃避行動etc.,

「フィールドワーク」＋「残余経験」＝人生（生活）

では「フィールドワーク」を「残余経験」から切り離すものはなにか？

答え：向こうに「目標」を、こちらに「報告」を設定する。



なぜそういうことになるかという、すでに何度も述べたように、フィールドワークはなんらかの「報告」を必須要件としているからです。つまりそれなりに評価される報告さえあれば、どんな活動だって今はフィールドワークと見做してよいのです。報告の内容と質については今ここでは問わないことにしますが(それを行うのが学問的議論なのですが)、なんらかの報告とは結論であって、その結論つまり終着点に至るためには出発点としての目標が設定されなければなりません。平たくいえば「この文章はこれこれを目的としたものです」というのが出発点であり、「こうでした」あるいは「こうではありませんでした」というのが終着点です。皆さんが卒業論文を書くとき、まず序論を置き、最後に結論を置きますね。それと同じです。そして本文に当たる部分にフィールドワークが置かれます。ここでちょっと考えていただきたいのが、たしかに文章の順番としては序論が真っ先に来ますが、普通は結論を先に確定させるのではないのでしょうか。出発したのはよいけれど、どこへ行き着くの

かわからないというのでは何も書き進めないと思います。ですから形式的には出発点がないければ終着点はない、しかし実質的には終着点が出発点を創り出すということなんです。ということは結局「目標」と「報告」は緊密に結びついていて、どちらが先ということのない同義反復のセットということになります。同義反復はトートロジーの訳で、トートロジーこそ数学の神髄であったことを思い出してください。近代科学の背骨です。

さてフィールドワークに話を戻すと、「目標」＝「報告」のセットは自己目的の投射ですから、あとから設定してもよい。そうすると中間に介在する「フィールドワーク」は単なる材料であり、アリバイ作りの手段と化します。そこではフィールドワークは「目標」＝「報告」のセットに即した単に技術的な問題を惹起するだけで、フィールドワークをもたらず生活(人生)のありよう、つまり残余経験は問題とならないことになります。最も豊穡な部分が切り捨てられるわけです。残念ながら、これが現在のフィールドワークの実情です。

そうしたフィールドワークなるもので想定されているのは、最近主流になっている期間限定の単目的調査です。しかし私のように年数や回数を重ねると、それにつれて「いつからいつまで、どこそこで、こういう調査をしました」ということが言えなくなってきました。目的や関心も多重化・流動化しますし、自分の立場や自分を取り巻く社会的・対人的環境も大きく変化してくるので、得られる知識の内容も流動化して拡散します。フィールドワークの性質は年齢や経験に応じて移り変わってゆき、「フィールドワーク」と「残余経験」の境界線も消滅してゆくというのが実感です。

そろそろ締めに入りましょう。そうした実感に基づいて、最後に二つのことを言っておきたいと思います。ひとつは、知識はいつでも暫定的であり、プロセスにすぎないということ。何かわかったと思っても、時移り、場が移れば、また違ったわかり方が生じてきます。いつもその連続で、おそらく終わりはないでしょう。

このことに加えて、二つ目に「同じことは二度と起こらない」ということも重要です。すでに偶然性のところでこのことは申し上げました。しかし「毎日同じことをしているよ」と反論されるかもしれませんね。たとえば「毎日朝起きたら歯磨きをしているよ、昨日も今日も、おそらく明日も来年も何十年先も」と。でもよく考えてみてください。「昨日は歯茎が痛かったから力を入れて磨けなかったけれど、今日は調子がいい」とか「昨日サンスターの歯磨き粉が終わってしまったから、今日からはライオンの新製品だ」とか「歯ブラシの毛先が大分へたってきちゃったな」とか「今日は寝坊して時間がないから、チャチャッといつもより早めに切り上げて家を出よう」とか、決して毎日「同じ」歯磨きではないはずです。それを「同じ」行動だというのはどこかで無理をしているのではないのでしょうか。

世の中に同じものや同じことというのは二つとないはずなのに、それらをまとめて「同じ」としてしまうというのは「見做す」行為です。そして「同じ」と見做すとき、それらとは「違う」グループを想定しているはずで、「歯磨き」に対する「朝食」とか「トイレ」などですね。「同じ」と「違う」は表裏一体、どちらが欠けても成り立たないワンセットの

認識行為です。分類と言ひ換えてもよいでしょう。数学の集合論がこの発想に基づいていることはいうまでもありません。そしてこの発想というか認識行為が恣意性(=自分勝手さ)によって成り立っているのはご理解いただけると思います。その恣意性を生み出す第一歩が「移し替え」、集合論でいうところの「写像」(Mapping)という操作です。英語の表現のほうがわかりやすいのですが、要するに地図を作るということです。実際の地べたなのでこぼこ紙の上の模様は何の関係もありませんが、それを「同じ」と見做すのが地図です。このあたりのことは後日の回でもっと詳しくお話したいと思いますが、「同じ」と「違う」という見做しのセットは実際にはひじょうに複雑に組み上げられています。ツリー(樹状)構造というのはそのうち最も単純な仕組みで、他にもたくさんの種類の仕組みがあり、いわゆる「関連付け」という作業はこれに関わってきますし、「論理」というものもこうした仕組みを支えるものですが、論理は一つではないわけです。「抽象化」とか「比喩」というのもこの線で考えてみた方がよいと思います。

いずれにせよ、世の中に同じものや同じこと(もちろん「同じ人」も)というのは二つとないという前提を受け入れるとすれば、パターン、秩序、傾向、法則、規則、周期性といったこれらなしには科学が成立しない志向を問題にする必要があるでしょう。端的にいうと確率論を成り立たせている志向です。それが悪いというつもりはありませんが、少なくともそれが一定の限界を持った特殊なものであるという認識は必要でしょう。

今日はこのくらいで終わりにしましょう。ちょっと長くなりすぎましたね。ではまた次回。